報告

「手話は言語だ」と改めて認識

太田　聡

1．はじめに

昨年（2019年）の夏、アメリカ言語学会主催のLinguistic Institute（以下 LIと略す）という言語学講座に参加して、カリフォルニア大学デービス校(UC Davis)で1ヶ月間過ごす機会があった。この LIでは、言語学の各分野の第一線で活躍している著名な講師陣が、最新の理論についてそれぞれ8回で分かりやすく講義してくれる。世界の言語研究の動向や最新の研究成果を知ることができ、大変貴重な機会である。私も、世界各地から集まった優秀な大学院生や若手研究者たちに混じって、たくさん出される課題を必死にこなしながら、久しぶりに本気で勉強をした。特に、語彙意味論という分野についての理解を深めることができたことが、大きな成果であった。

さて、このLIでは、上述のような昼間の授業だけでなく、放課後や週末にはチュートリアルや様々なワークショップ／カンファレンスが開かれ、また夜には、週に2回ほど、その分野では世界的権威というような超大物研究者による講演もあった。こうした中で、私にとってもっとも印象深かったのが、手話言語学についての手話による講演を見た／聞いたことであった。本稿の目的は、この手話についての講演の様子をお伝えすることである。が、その前に、私がこれまでアメリカや日本で手話通訳に接して感じてきたことも紹介してみたい。

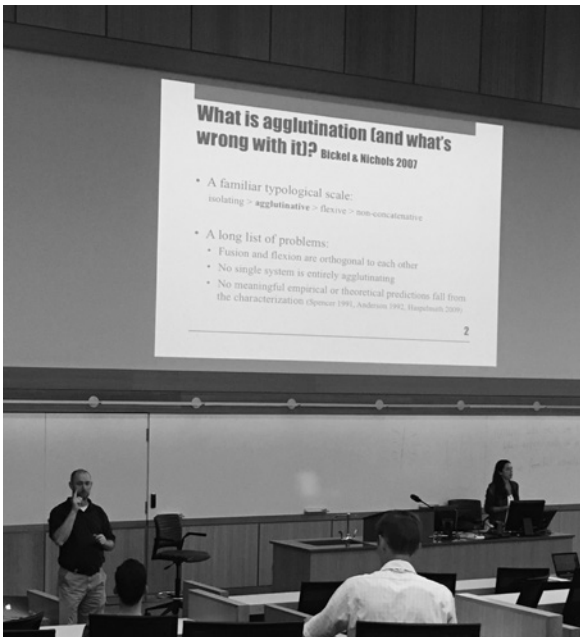
2．日米での手話通訳の広がりや意識の差

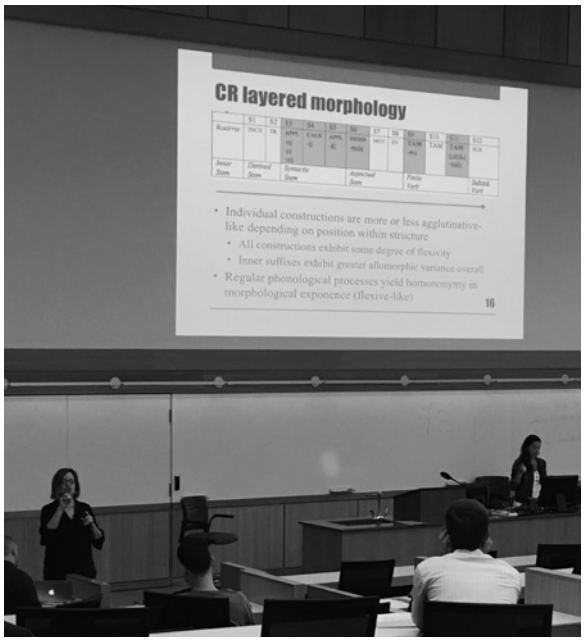
私がはじめて手話の重要性や底力のようなものを感じたのは、2005年の夏にマサチューセッツ工科大学(MIT)で、生成文法の創始者であるNoam Chomskyの連続講義を受講したときであった。生成文法理論は1955年に始まったので、2005年は、生成文法誕生からちょうど半世紀（50周年）の年に当たり、記念のお祭りのようなものがMITであった。また、2005年のLIの開催校もMITであったので、私は3週間ほどMITの寮に寝泊りしながら、有名言語学者たちの名講義をいくつも受講した。そうした中で、やはり圧巻だったのはChomskyの講義で、受講した日は脳みそが興奮して、夜なかなか眠れないほどであった。Chomskyがあまりに有名なため、その講義にはおよそ500人が詰めかけ、MITで一番広い大講義室でも立ち見が出るほどだった。そうした中に、一人だけ耳の聞こえない人がいたので、手話の同時通訳者が二人（翌日は違う二人組みだったので、合計四人）雇われていた。このときChomskyが行った講義の内容は、その時点での最先端の統語理論に関するもので、かなり抽象的・概念的な面があったり、ぽんぽんテクニカルタームや略称が飛び出したりするのだが、それを瞬時にそして的確に手話で伝えていく同時通訳者に、私はいたく感心した。Chomskyは、前もってPowerPointで資料を作ってホームページにアップしておくようなことはなく、言い忘れてはいけないことを最低限（1～2枚の紙に）メモしてくるだけの人である。よって、その日の話の内容を予習しておくことなどできない。また、受講者の中には言語学が専門ではない人もいて、かなり的外れな質問が飛び出し、話が随分おかしな方向にずれたりもするし、Chomskyが喋りながら突然思い出したように例を板書したりもする。そのような場合にも、手話通訳者は平然と訳し続けていたので、感服してしまった。通訳者は、おそらく、講演者の以前の著作を読むなどして、その人が述べそうな内容を前もってある程度把握し

ているのであろうと思う。つまり、優れた同時通訳者は、単に語学に堪能というのではなく、大変な勉強家なのだろうと思う。（下の写真はChomskyの講義を横で手話通訳している様子である。）

ところで、（手話通訳ではないが、）同時通訳に関して、私にはこのような経験がある。もうかなり前の1992年の話だか、奈良の国際会議場で、日本語に関する国際会議が開かれ、それに私も参加した。その会議には、（あまり英語は得意でない）いわゆる国語学者も多く参加していたが、海外からの講演者のほとんどは英語で発表するため、同時通訳者が雇われていた。そして、昼食時に、この同時通訳担当のお二人とたまたまレストランで一緒になったので、せっかくだからちょっと聞いてみようという気持ちになり、「どうして通訳の途中の、あまり切りのよくないところで交替するのですか？」と尋ねてみた。すると、「同時通訳はとても神経を使うので、だいたい20分が限界で、それ以上続けるとミスが多くなります。だから、20分で交替するように決めているのです」という答えが返ってきた。この答えに、それまでなんとなく不思議に思っていた謎が氷解した気分だった。テレビのニュースの同時通訳などを聞いているときに、話の途中なのに突然通訳者が入れ替わることがあったので、「なぜだろう？　トイレにでも行きたくなったのかな？」などそれまでは思っていた。しかし、ミス防止のため同時通訳には20分交替の原則があることを、そのとき知ることになった。そして、日本で知ったこの20分交替の原則は、興味深いことに、アメリカ手話の同時通訳にも共通していて、観察していると、二人が20分ずつで交替することに気がついた。

MITで手話通訳に感激して以降も、ミシガン大学など、他のいくつかの大学でもLIやワークショップ等に参加したが、やはり、受講者・参加者の中に一人でも聾者がいると、その会場に手話通訳者が二人でやって来て、授業や講演内容を同時通訳している姿を見てきた。そしてその度に「アメリカは進んでいるなー。日本はいつこうなるんだろう」と思ったことだった。（次の写真は、ケンタッキー大学であった形態論のワークショップに参加したときに写したもので、同じ発表者のプレゼンの間に、手話通訳者が男性から女性に代わっている。）





日本でも、10年くらい前から、ある程度大きな学会であれば、子連れでも大会に参加しやすいように「親と子の部屋」というような名称の部屋が設けられ、母親ないし父親が研究発表等に参加しているときには、保育士の資格を持っている人が子供を遊ばせておいてくれるようなサービスが実施されるようになった。よって、学会の開催校を引き受けた場合には、こういった準備も行わなくてはならないし、利用希望者へのアナウンスも前もってなされるようになった。しかしながら、日本の学会行事で手話通訳に関する案内がなされることはほとんどなかった。ところが、2016年に大阪大学を会場にして開かれた日本言語学会の夏期講座において、あるクラスで、受講者に手話通訳者が付き添っているのを見かけ、「日本の学会でも、手話通訳がようやく行われるようになったかー」と、感慨深かった。

さて、ここまでの手話通訳は、授業や講演会の受講者・参加者の中に耳に障害がある人がいる場合の話であったが、次に述べるのは、「講演者が聾者である講演会に参加」という初めての経験をしたときの感想である。

3．手話の言語性に感動！

私は、普段は日記など付けないのだが、2019年7月11日（木）は、寝る前に次のように書き残している（だいぶ余計なことも含まれているが、以下は、typo以外はそのときのままの文章である）。なお、節末に載せた写真は、UC Davisの言語学科がしばらくYouTubeとFacebookにアップしていた動画から撮ったため、かなり不鮮明なものになってしまった。

今夜のForum Lecture 2のErin Wilkinson教授(University of New Mexico)の講演は、期せずして、こちら(UC Davis)に来てもっとも感動・感心したものとなった。昨夜abstractを見たら、signed languagesのtypological markednessについてとのことだったので、「日本手話の特徴なども少し聞くことができるかも･･･」くらいの気持ちで参加することにした。午後2時半に木曜日に受講している授業（generative lexicon関係）が終わって、図書館でしばらく論文を読んだ後、学内の名所（給水塔など）を少し写しておこうと思い立ち、最初は徒歩で、途中からはやはり車で、学内を回った。すると、「UC Davis」と書かれた給水塔が

学内に2つあることを発見した。それで、どちらがパンフレットなどに載っているものかを確かめたくなって、（車では行けない）両方の塔の真下まで暑い中歩いて行ったりした。その道すがら、あれこれ他のものも写しているうちに、スマホがバッテリー切れになってしまった（今日に限って充電器も持っていなかった）。そのため、Wilkinson教授の講演の様子を自分では1枚も写せなかった。痛恨の極みであった。が、その分、心のカメラに焼き付けようとしたし、こうやって書いて残そうという気持ちになった。

Conference Hallの会場に15分くらい早く着いて、前列の方に座ると、すぐ前で、Wilkinson教授と手話通訳担当の2人が、「手話」で談笑していた。昨夜、abstractを読んだときについでに見たHPの写真では、ツンとした感じの女性だと思えたのだが、実物は、ややぽっちゃりしていて、とてもお茶目な感じの人だった。手話で話している様子が、まるでサーカスのピエロの動きのように見え、他人を楽しませるサービス精神がたっぷりといった感じだった。

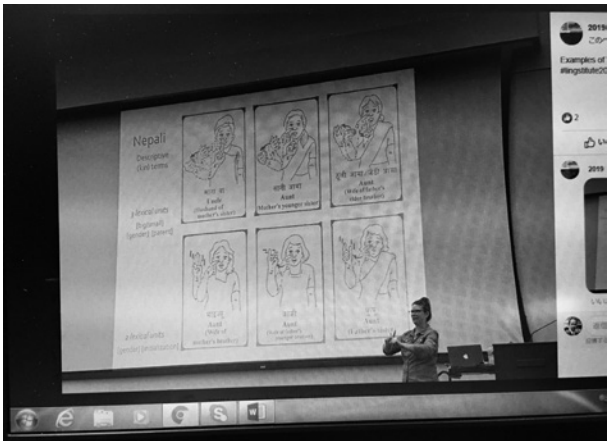
講演会の最初に、いつものようにUC DavisのAranovich教授による全体的なお知らせ・今後の予定の話があった後、Wilkinson教授の略歴等の紹介を、UC DavisのCorina教授が手話で行い、手話通訳の人がそれを訳した（すなわち声にした）ので、なんだか変なサービスだなと思った。そして、いよいよWilkinson教授の講演が始まり、（あんなに茶目っ気たっぷりにsign languageで話していたから、spoken languageもきっと茶目っ気たっぷりだろうと思ったら、）予想が大きく外れてしまった。なんと、Wilkinson教授が手話で講演を行い、それを手話通訳者が音声言語に同時通訳したのだ。これには非常に驚いた。最初の挨拶の部分だけを半分ジョークでやっているのかと思ったら、1時間ずっと手話での講演がなされた。そして、2人の手話通訳者が（これまで目にした手話通訳の場合と同じように、）20分ずつで交替していた。「こんなことができるのか」とただただビックリした。Wilkinson教授自身がdeafだったのだ。「大学だけでなく、アメリカでは小学校とかでもdeafの人のために手話通訳者が付き添うことがあるのだろか、そうしないと、学校の先生の話を理解できなかっただろうから･･･。でもやはり、いわゆる聾学校に通うのだろうな･･･」というようなことが頭の中に巡った。いずれにしても、耳が聞こえなくて博士号まで取るのは大変な苦労だっただろう。

そして圧巻は、1時間の講演の後の質問タイムでの光景だった。2人の手話通訳者のうちの1人が立ち上がって講演者の右横の少し離れたところに立ち、残りの1人は講演者の正面の椅子に座ったままで、フロアーからの（声での）質問を、立っている通訳者が同時通訳し、それを講演者は見ていた（つまり、質問者の方向よりもむしろ通訳者の方を見ていた）。そして、質問の途中であっても、少し手が動くことがある（「なるほど、そうですね」みたいな感じだ）。すると、座っている手話通訳者がすかさずそれを音声に訳す。そして、回答ももちろん手話で行われて、見事に音声に変換されていく。言語学のテクニカルタームがかなり混じっているのに、もれなく・よどまず訳されていくのには本当に感動する。

今まで、講演者の音声を、参加者の中に耳が不自由な人がいると、通訳者が手話で同時通訳するという光景は何度も見てきたが、今回は、講演者が手話で講演を行い、それを同時通訳者が音声言語にしていき、皆がそれを聴き入る、というなんとも貴重な経験をした。そして、最後の拍手の場面でも（拍手をしても講演者の耳には聞こえないので、）皆が両手を上げてクルクルっと回して拍手の意を伝えたので、「なるほど、これが拍手のサインか」と自分も真似をした。

アメリカの手話通訳はとにかく進んでいる。日本でこういったことが行われるのはまだずっと先のことだろう。

補記：手話が音声に訳されてそれを聞くという体験は、最初はとても違和感があったし、「音声言語を翻訳された手話で理解している人たちはこんな気持ちなのか」とも感じた。通常、著名な研究者の講演は、その話し方に魅力や迫力があって、（大して中身は理解できていなくても、）感激するものである。ところが、その感動を呼ぶ「声」がなくて、通訳者を通して話が送られてくるので、ワンクッションあるというか、昔の人工衛星を使ったテレビ中継で1, 2秒遅れて声が届いたような感じというか、とにかく、はじめはどことなくしっくりこなくて、眠くなりそうな気がした。ところが、講演が進むにつれて、だんだん（通常の講演会とまったく変わらないように）話に引き込まれていった。隣に座っていたアメリカ人女性も、はじめのうちはややつまらなそうな態度でいたが、途中から、「なるほど！」といった具合に小さな声を出したり、頷いたりしながら聞いていた。今回の体験から、手話は自然言語とまったく変わらなくて、日本語を英語に訳したり、英語を日本語に訳したりするのと同じように通訳・翻訳できることがしっかり分かった。もしかすると、音声言語の場合よりも、同時通訳では、音という邪魔がなくて、かえって聞き取りやすいかも･･･とさえ思えた。



4．おわりに

手話とは、耳の聞こえない人のために、「あ」とか「い」とかいう音声を手や指の動きで表す補助的なコミュニケーション手段、というくらいの認識しかない人も多いと思う。インテリであっても、誤解している人は多い。私は以前、手話言語学の世界的権威であるSusan Fischer先生から、先生が日本に滞在中に（正確には大阪の国立民族学博物館で研究中に）、「山口大学で講義をしてもよいですよ」という又とないありがたいお申し出をいただいたことがあった。そこで、「英語の文法と手話の文法の比較」というテーマで、英語学の集中講義をお願いしたいという提案をしてみた。ところが、ある同僚から強く反対され、実現することができなかった。こうした出来事が物語っているのは、「手話――『手話』と呼ばれるが、手の動きだけでなく、実は顔の表情も重要――は言語であり、そこには構造があり、文法がある」といった認識がまだ浸透していない、ということであろう（例えば、「英語と日本語の比較」などであれば、授業や研究のテーマとして、誰も反対はしないであろうが、手話との比較となると、悲しいことに「おかしい」という反応になりがちなのである）。なお、Fischer先生には、集中講義はお願いできなかったが、異文化交流研究施設主催の講演会という形でご講演をいただいた。そして、その講演内容は、和田学氏によってまとめられ、本誌（『異文化研究』）の第8号に収録されているので、参照されたい。